【第２３話】俺って淫魔で女かも？

　気が付いたら下半身丸出しで洋子に抱きついていた。深い反省と共に百回以上詫びた陵は、同時に心の底で蘭を呪った。何がどうなったのかはよく判らないが、とりあえず全ては蘭のせいに違いない。

　カラオケ屋で蘭と秘書の栄に会ってから三日が過ぎた。あれから洋子はやけによそよそしい気がする。もしかしてやっぱり変な格好で抱きついたのがまずかったのだろうか。ヒューマノイドだと言っても洋子が女性であることには変わりはない。下半身を丸出しにした男に抱きつかれたら警戒するのが当然だ。

「うあー！」

　端末を使って遊んでいても気が晴れず、陵は声を張り上げて頭をかきむしった。食事や睡眠も問題なくとれているし、生活そのものには何の支障もない。だが平たく言えば陵は退屈しきっていた。

　結衣に初めて声を掛けられたあの日から、やけに周囲は慌ただしくなった。それに慣れたから、もしかしたら今の状況を退屈と感じるのかも知れない。そんなことを考えながら陵は机に突っ伏した。

　来週には正式な入寮日が来る。だがそれまで特に生活に変化らしいものはなさそうだ。洋子からは外出禁止をきつく言い渡されているし、しかもその洋子はあれから構ってくれない。たまに顔を合わせても挨拶する程度ですぐに去ってしまうのだ。

人間じゃないとか女だとか好き放題言いやがって。退屈のあまりにこの間のことを思い出した陵は、心の底で蘭をこき下ろした。洋子が跳び蹴りだけで勘弁してやれというから、仕方なく出会い頭に跳び蹴りを一発入れただけで許してやったのに。そんなことを呟きながら陵はがたんと立ち上がった。

こういう時は寝るに限る。きっぱりとそう言って陵はベッドに飛び込むようにして横たわった。ちなみに今日は奇数日だから陵はスカートをはいている。ベッドにうつ伏せになった陵は情けない顔でスカートをつまんでみた。

でもよく考えたら、部屋の中でまでスカートをはく理由はないのでは。ふとそう考えて陵はがばっと身を起こし、早速、スカートを脱ぎ始めた。そう、こんなものを身に着けているから気分も余計暗くなるのだ。ここはやっぱり、部屋の中でくらい開放的な気分に浸るべきだ。そんなことを考えながらスカートを脱いで床に蹴落とし、特製下着を取って放り出したところで陵は改めてベッドに大の字になって寝転んだ。あの忌まわしい特製下着を脱ぐと何だか気分が少しすっきりした気がする。

不意に部屋のドアがノックされる。陵はびくんと身を竦めて慌てて返事をしてからはっと我に返った。急いでベッドを降りてスカートを取り上げたところでドアが開く。

「綾さん。こんにちは……。って、何をしてらっしゃったのですか？」

部屋に入ってきた洋子が笑い混じりに言う。陵は真っ赤

になって慌てて股間を手で押さえて洋子に背を向けた。ちなみにいまは昼で、洋子は三つ編みに眼鏡という図書委員な感じの格好をしている。

「う、えと、ちょっと開放的になろうかと」
「これから話をしましょう。脱いでいたのはちょうどいいです。これを、着けてください」

　そう言いながら洋子がポケットを探ってコンドームを取り出す。差し出されたそれを情けない顔で受け取り、陵は自分の股間を見下ろした。

「あの……たたないと着けられないんだけど……」

　萎えたペニスを見つめて陵は困惑に顔を歪めた。

「それでは、これで」

　そう言った洋子がスカートをたくし上げてショーツを脱ぎ去る。洋子の股間を見た途端、陵のペニスは一気に勃起した。何度も体験して判っているつもりなのだが、機械であると判るだけで節操もなく昂奮するのはどうなんだろう。そんなことを考えた陵は苦悩に呻いたが、コンドームはペニスにしっかりと装着した。

「つ、つけたけど」
「それでは服を着て、ついて来てください」

　洋子に促され、陵は急いで脱ぎ散らかしていた服を元通りに着込んで部屋を出た。先を行く洋子が廊下を通って自分の部屋に向かう。陵は案内されるままに洋子の部屋に入った。

「えーと？　それで？　話って？」

　退屈しきっていた陵は期待をこめてそう訊ねた。洋子の部屋は陵が使っている部屋より一回り大きい。部屋の隅に置かれたダブルベッドは大きく立派で、その脇には端末が二台並んでいる。そしてその横には歯科の診察椅子のようなものが置いてあった。陵は物珍しさに任せてそれらを見つめ、天井を仰いだところでカメラが数台つり下がっていることに気付いた。

「まず結衣さんの、ええと、『退院』が決定したのでお知らせします。今夜、夕食後に地下の研究施設まで引き取りに行くことになりました」
「ほんとか！？」

　天井のカメラを見上げていた陵は慌てて洋子に目を戻した。

「はい。おめでとうございます」

　頷いた洋子が言うのを聞いて陵は首を傾げた。

「おめでとう……は、なんか微妙？」
「今夜は初夜ですよ」

　笑い混じりに洋子が言う。それを聞いた陵ははっとして慌てて股間を押さえた。ついつい結衣の身体を弄くり回すことを想像してしまったために、ペニスが痛いくらいにそそり立ってしまう。

「う、うー……。俺、上手く出来るかなあ……」

　初めてなんだよなあ、と呟いて陵は恐る恐る股間から手を離した。

「以前、お約束したとおり、私がフォローしますから、問題無いと思いますけど」
「あ、うん。そうなんだけど、セックスを、その、したことないからどうなのかとか」

　あはは、と笑って陵は頭をかいた。結衣が機械であるという以前に、陵は童貞だった。陵は空笑いしながらそのことを伝えた。すると洋子が頷く。

「もちろんセックス行為に関してもフォローいたします。生身の女性との経験がない方が、逆に戸惑わないと思いますし、問題ありません」
「あ、そっか。そうだよな」

　洋子の説明に納得して陵は頷いた。そっかあ、初夜か。そう呟いて陵はだらしなく顔を緩めた。だがすぐに思い直して顔を引き締める。考えてみれば結衣は被害者なのだ。そう思った陵の顔は自然と暗くなった。

「目覚めた結衣さんは、かなり混乱されると思います。綾さんも平静では居られないと思いますが、綾さんがいつもなさっているように正直に誠意を持って話されれば大丈夫でしょう」
「あ、うん、もちろんちゃんと話すけど」

　そこまで言って陵はふと気付いた。そういえば今日は洋子の方から話があると誘ってくれたが、あの時に抱きつい

たことはもう気にしていないのだろうか。

「あの、会長さんに……その、抱きついたの、まだ怒ってる？」

　不安をこめて陵はそう訊ねた。

「えっ、怒ってるだなんて、そんなこと、悪いのは私のほうですし」

　そう言って洋子が何故か俯く。陵は驚いて目を見開いた。

「何で？　俺が抱きついたんだし、悪いのは俺だと思うけど？」

　なんで洋子がそんなことを言うのか判らず、陵はそう訊ねた。実際、気が付いたら洋子をベッドに組み伏せる格好になっていたのだ。きっと洋子は不快に思ったに違いないだろう。

「あの日の事については、きちんと顛末をお話しようと思っていました。これから、夕食前までお時間を頂きたいのですが、構いませんか？」

　ゆらりと顔を上げた洋子がやけに真面目な顔をして言う。陵は面くらいつつも慌てて頷いた。

「う、うん。俺は構わないよ」
「遅くなってしまってすみません。私に可能な限りの調査を行って裏をとっていましたので。まず、カラオケルームでお話していた際、いろいろと、ショッキングな発言があったことを覚えてらっしゃいますか？」

　そう言いながら洋子が傍にあったソファを指差す。勧められるままに陵はそこに腰掛けた。向かいの席に洋子が静かに腰掛ける。

「うん、蘭兄が変なことばっかり言ってて」

　当日のことを思い出しながら陵は横を向いてこぶしを握り固めた。

「変な事の主な内容は二点。綾さんが人間でない。綾さんは本当は女性である。そうでしたよね？」

　穏やかな洋子の声に誘われるようにして陵は顔の向きを戻して力強く頷いた。

「そう！　そうなんだよ、蘭兄め、訳が判らない嘘ばっかりつきやがって」
「どうして、嘘だと決めつけることができるのですか？」
「え？　だってあり得ないよな？」

　目を丸くして陵は慌ててテーブルに身を乗り出した。目の前に腰掛ける洋子はごく穏やかな表情をしている。どうも冗談を言っている風ではない。そのことに気付いて陵は眉を寄せた。

「魔が世間に認知される前に、魔についての警告を発した人物が何人か居ました。世間一般の反応は『そんなバカなこと、ありえない』そんな感じでしたが、その後どうなったかは、学校で習いましたよね？」
「あ……うん、習った」

　中学の歴史の時間に学んだことを思い出しつつ、陵は浮かせていた腰を元の位置に戻した。

「あなたのお兄さんの発言内容が、どうして、有り得ない事なのか、確固たる論理的な根拠があったら、教えていただけますか？」
「う」

　洋子に問われて陵は言葉に詰まった。気に入らない、という以外の理由が今のところ見当たらない。仕方なく陵は首を横に振った。

「ない、けど……」
「嘘の可能性もあるけど、もしかしたら、本当かもしれない。というスタンスで、これからの話を聞いてください」
「あ、うん。わかった」

　陵は釈然としないものを覚えつつも、洋子の言葉に頷いた。

「綾さん、あなたはカラオケルームからトイレに向かわれて倒れてから、一時間半ほど、ホテルでわたしに抱きついた状態で目覚めるまで意識がありませんでしたよね？」
「あー……うん」

　天井を仰いで当時のことを思い起こしながら陵は頷いた。そう。切羽詰まったものを出すためにトイレに走ったところで店員に腕をつかまれた。そこまでは覚えている。が、その先の記憶がない。気付いた時には何故かベッドで洋子に抱きついていたのだ。

「その間の出来事を、私の視点から録画したビデオデータを観賞可能なようにしてあります。前方の大画面テレビで映しますので、まず、ご覧になってください」
「は？　録画？」

　陵の問い掛けに頷いた洋子がテーブルの上の小さなリモコンに触れる。すると壁に設えられた巨大なモニタにいきなり自分の顔が映し出された。陵はびくっと身を竦めてうろたえつつも、画面をじっと見た。洋子の視点ということは、どうやら洋子がソファに横たわる自分の顔を覗き込んでいるらしい。

　その後、今度は画面に蘭の姿が映し出される。どうやらこれは先日行ったカラオケ屋の部屋らしい。ということは倒れた直後か。そんなことを陵が呟いている間にまた画面が動く。次に見たものに陵はひくりと頬を引きつらせた。何故か判らないが蘭の腕に陵が抱えられている。

「音声も入れますね。私が録音しているので、私自身の声が籠もって多少聞き取りにくいと思いますがご了承ください」

　洋子がそう言ってリモコンに触れたところで、急によく知る声が聞こえてくる。その声に陵は思わず身を竦めた。どうやらモニタ脇のスピーカーから音が流れてきたらしい。陵を抱えた蘭が真っ赤な車に寄る。どうやら洋子の車で移動するらしい。陵を後部席に乗せた蘭が洋子の隣に乗り込み、秘書の栄が車から離れていく。

　車が動き出したところで陵は何度か目を擦った。洋子の視点で見ると周囲の車がもの凄いスピードで動いているよ

うに見える。が、実際には洋子の運転する車がそれだけスピードを出しているのだろう。そんな洋子の車の横に白い車がベタ付けする。二台が疾走する様を陵は手に汗を握ってじっと見守った。

　やがて車がどこかで停まる。どでかいホテルの玄関を見た陵はあんぐりと口を開けた。自分には永遠に無関係そうな高級ホテルの玄関に当たり前の顔をした蘭が進んでいく。その腕には陵が抱えられている。その後に栄が続く。

「蘭兄……金持ち……」

　呆然とモニタ画面を見つめていた陵は、他に何も言えず、それだけを呟いた。陵は蘭の仕事はもちろんだが、私生活の殆どを知らない。陵が学校から帰って家族と食卓を囲む時には姿も見るが、朝にはもう蘭は大抵は家を出てしまっている。

　それだけではない。蘭は休日に家にいることが殆どないのだ。陵も友達とよく遊び歩いていたから家を空けることは多かったが、考えてみると変な話だ。普段、仕事をしているのなら休日くらいは家にいてもいいのではないだろうか。だが、蘭は休日は必ず朝から出かけていた。

「そうですね」

　洋子の苦笑を陵は見ていなかった。目はモニタに釘付けになってしまっている。そのモニタにはどこかの部屋に入る様子が画面に映し出された。それを見た陵は驚きに目を丸くした。高級そうなやたらと大きなホテルの、更に高級そうな広い部屋を蘭が進んでいく後ろ姿が見える。やがて

蘭は広い部屋を抜けてベッドのある部屋に入った。

「なっ、なんか嫌なシチュエーションなんですけど」

　陵を腕に抱える蘭が寝室に入るところを目の当たりにし、陵は頬を引きつらせて呟いた。実際には洋子も栄もいるのだろうが、画面に映っていないのだ。

『汚染度レベル８突破』

　不意に洋子の声がスピーカーからはっきりと聞こえる。居たたまれなさに顔をしかめていた陵は訝りに眉を寄せた。だがすぐに疑問は解消された。洋子が撮影しているのだから、洋子の声だけが妙に明瞭なのは当たり前だ。それは判ったのだが、陵は嫌な予感を拭いきれずにいた。

　モニタ画面にはベッドに横たわった陵の姿が画面に大きく映し出されている。

「この時、確かに汚染度はレベル８を突破していました。普通の人間なら、半数致死レベルです」
「はんすうちし？」
「５０パーセントの確率で死んでしまうという意味です」
「えっ！　俺、死んじゃうの？」

　焦った陵は画面に映った自分を指差して喚いた。だがそこではたと気付く。いや、死んでないから自分がここにいるのだ。

「あれ？」
「……見ていてください」

洋子に言われ、陵は慌てて画面に目を戻した。スピーカーからは蘭の淡々とした声が聞こえてくる。どうやら蘭は陵の服を脱がせてもいいかと聞いているらしい。その質問に洋子が口早に答えた後、栄が何故かそれをたしなめる。

「ぬ、脱がすって蘭兄、なに考えて……」

無意識に赤くなって陵は顔をしかめた。だがそんな陵とは対照的に洋子は冷静そのものだ。

「私に、ある現象を見せるためです。会話については聞き取りにくいから解りにくいでしょうけど見ていてください」

真剣な顔で洋子に言われ、陵は慌てて頷いた。よく判らないやり取りが続いた後、栄が陵の服を脱がせ始める。陵は自分が今されている訳ではないと知りつつも、居たたまれなさに身を縮こまらせた。

不意に自分の姿が大写しになる。どうやら洋子が画面の中の陵に近づいたらしい。陵はびくっ、と身を竦めて顔を歪めた。どうも自分の姿というのは見ていて気分がいいものではない。そんなことを考えていた陵は、画面に映し出されたものに口をあんぐりとあけた。

洋子が間近に見ているのは確かに陵の胸元だ。が、そこには何故か小振りな膨らみがあった。

「なー！？」

画面を凝視しながら陵は奇声を上げてがばっと立ち上がった。

「とりあえず一時停止します。乳房が膨らんでるのわかりますか？」
「なっ、なっ、なっ」

　陵は顔を真っ赤にして途切れ途切れに声を漏らした。洋子が言った通り、画面には陵の胸元が大写しにされたところで映像は止まっている。

「なんでー！」

　陵は訳が判らず頭を押さえて声を張り上げた。

「ショックなのは解りますけど、とりあえず落ち着いてください」
「うっ、わっ、わかった」

　混乱を必死で抑えて陵はぎこちなくソファに座り直した。何で自分の胸に女のような膨れた乳房があるのだろうか。陵は頭を抱えて俯き、低く呻いた。

「進めます。もっとショックを感じると思いますけど、落ち着いて見てください」

　洋子に声を掛けられて陵はのろのろと頭を上げた。これ以上のショックなんてあるはずがない。そんなことを思いながら画面を見ていた陵は、息を詰めて逃げ出したくなるのを根性で堪えた。洋子が陵のスカートをめくったらしい。忌まわしい特製下着が大写しになる。その後、現れたのはいつもよりずっと小さい自分のペニスだった。

「ぐっ！」

　叫びそうになるのを懸命に堪え、陵は全身をわなわなと震わせた。

「この場面はスローで再生します」

　そう言って洋子がリモコンを操作する。小さくなっていた陵のペニスがさらに縮んでいくのが判る。陵は睨むように画面を見据え、膝の上でこぶしを握りしめた。

「とりあえず、ここまででいったんビデオの再生は休止します」

　洋子がそう言いながらリモコンを操作すると、モニタ画面は急に暗くなった。陵はこぶしを震わせながらゆっくりと深呼吸をした。画面に映されたものは信じがたいが、気絶していた自分の状態を記録されたものには違いないようだ。だがやっぱり信じられない。

「おちつけ……おちつけ……今はある、だいじょうぶだ」

　呪文のように唱えながら、陵は股間を押さえてそこにいつものサイズのペニスがあることを確かめた。

～立ち読み版はここまでです～